

エルサ・ベスコフの絵本研究④ 季節の廻りと子ども

Study on picture books by Elsa Beskow
- Around the seasons and children -

美谷島 いく子
Ikuko BIYAJIMA

要旨

スウェーデンの絵本作家エルサ・ベスコフは、季節の廻りに対して独特の感受性を持った絵本作家である。「季節の廻りと子ども」を描いたベスコフの絵本と英国のウォルター・クレーンの絵本及び年代は異なるが同じテーマのドイツとアメリカの絵本と比較・考察した。その結果、クレーンからの引用（部分的模倣）が見られたが、スウェーデンという地の北方性を付加しながら、ベスコフ独自の近代的な自然主義的風景や母子像を創造していることを明らかにした。

キーワード：季節の廻り、老人と子ども、冬王、春の女王、擬人化

1. はじめに

スウェーデンのエルサ・ベスコフ（1874～1953）は、季節の廻りに独特の感性を持った絵本作家である。一年の時の廻りを、月毎に描いた絵本“Årets Saga（いちねんのうた：1927）”に象徴されるように、北欧の自然の中で、幼い子どもがどのように過しているか、廻り来る季節とどのように出会い、別れるかを、絵本の中に繰り返し描いている。

冬生まれの、スキーが大好きな少年ウツレ（6歳）が、雪が溶けてしまう春をどのように迎えるかを描いた絵本に『ウツレのスキーの旅（1907）』（“Olles Skidfärd”）がある。

太陽の光が強くなり、一年じゅうで一番日が長く、白夜が続く夏至の頃を、おひさまがおかと呼ばれている屋敷で暮らしている子どもたちが、どのように過しているか描いた絵本に『おひさまがおかの子どもたち（1898）』がある。又、リーサという女の子のもう一つの夏至祭を描いた絵本に『リーサの庭の花祭り（1914）』がある。

ラッセという男の子の、夏から秋への交叉祭を描いた絵本に『ラッセの庭で（1920）』がある。母と子が、赤く実った Rönn bärr（ナナカマド）に話しかける絵本に『Görans bok（ヨーランのノート）（1916）』がある。

オーディンが都を定めたとされる古都シグチューナを舞台に展開される、三人のおばさんシリーズの中の、クリスマスにやぎおじさんがプレゼントを持ってくる絵本『ベッテルとロットのクリスマス（1947）』がある。

これらの絵本をみてゆくと、ベスコフの特徴として、現実には目に見えない季節の廻りや時の訪れを、擬人化して描いている。

例えば、白霜じいさん、雪どけばあさん、冬王、春の王女様、夏至の精、9月さん、10月さん、去年さん、新年さん、3月じいさん、4月（道化）等がある。

これらのベスコフの絵本が出版された頃の時代背景を考えると、拙著『リーサとラッセ』に述べ

ているように6)、19世紀末～20世紀初めは、ユーゲント・シュティルの盛んな時期で、1896年にストックホルムで、英国のウォルター・クレーン展が開催された。故に、ベスコフの絵本はクレーンの影響を受けていると思われる。クレーンの絵本には、世紀末の芸術の特色である Metamorphose (形態の変容、変態) が描かれ^{7) 注}、擬人化^{8) 注}が多く行われている。

ベスコフが具体的にどのように擬人化しているかを、Walter Crane (1845-1915) の絵本 “Flora’s Feast (1889) 『花の宴』” や “A Masque of Days (1901) 『暦の仮面舞踏会』” 等と比較して探り、ベスコフの絵本の特色を明らかにしたい。

2. 季節の廻りの擬人化の解明

1) 1月 去年さん、新年さん

『いちねんのうた』(1927) では、Walter Crane 作『暦の仮面舞踏会』の影響が見られる。Walter Crane 作『暦の仮面舞踏会』では、砂時計と柁が描かれ、古い年が死に新しい年が青年に達したと描かれている。古い年は、黒衣をまとった老人として描かれ、青年は、左手にシルクハット、右手に杖を持つしゃれ者の若い紳士として描かれている。青年は、1年の全ての日を招いて晩餐会を開く。(図1参照)

ベスコフの『いちねんのうた』の1月では、振り子時計とクリスマスツリーが描かれ、去年さんは、黒衣を纏い長い白鬚を生やし、杖をついた老人として描かれ、戸口から出て行こうとしている。新年さんは、肩にかばんを掛け、右手にスキーのストックを持ち、天使の姿で描かれている。当時、子どもは天使のように愛らしく純粹無垢のものとして捉えられていた。(図2参照)

左ページには、1月6日の12日節に、主人公の三人の子どもが「三博士の門付け」⁹⁾ (Sternsinger: 星の歌い手) をしている絵が描かれている。ベスコフは、子どもが新年を迎える象徴的な役割を果していると、とらえていることが分る。

その特性を整理して考察すると次のようになる。

- ①新年さんとして形象化された天使が、スキーのストックを右手に持っている点に、北方性の付加が見られる。スウェーデンは、英国より北に位置し、スキーをはいた雪の中の生活が冬の日常である。
- ②北欧人の精神の基層にある北欧神話『エッダ』には、スキーを履いた神(即ち男神ウルと女神スカジ)が登場する。スカジは、スカンジナビア半島の語源となった。男神ウルは、ベスコフの絵本の主人公ウツレと名前が似ている。
- ③ベスコフの描く去年さんは、クレーンの描く古い年と似ている。クレーンでは、死んだとなっているが、ベスコフでは、戸口から出てゆこうとしている。新年さんは、クレーンでは青年として描かれているのに対して、小さな天使(子供)の姿で描かれている。
- ④擬人化された季節(時間)と子どもとの交流の仕方: くたびれて戸口に立っている年寄りの去年さんに、3人の子どもは「ありがとう もうすぐ 古い思い出になるね!」と別れの挨拶をしている。一方、12時がボーンと鳴り、廻ってきたばかりの新年さんに、3人の子どもは、縦一列に並んで対面して、「よろこび お日さま 春 そして感謝の気持ちを連れて来て!」と願いを込めて迎えている。

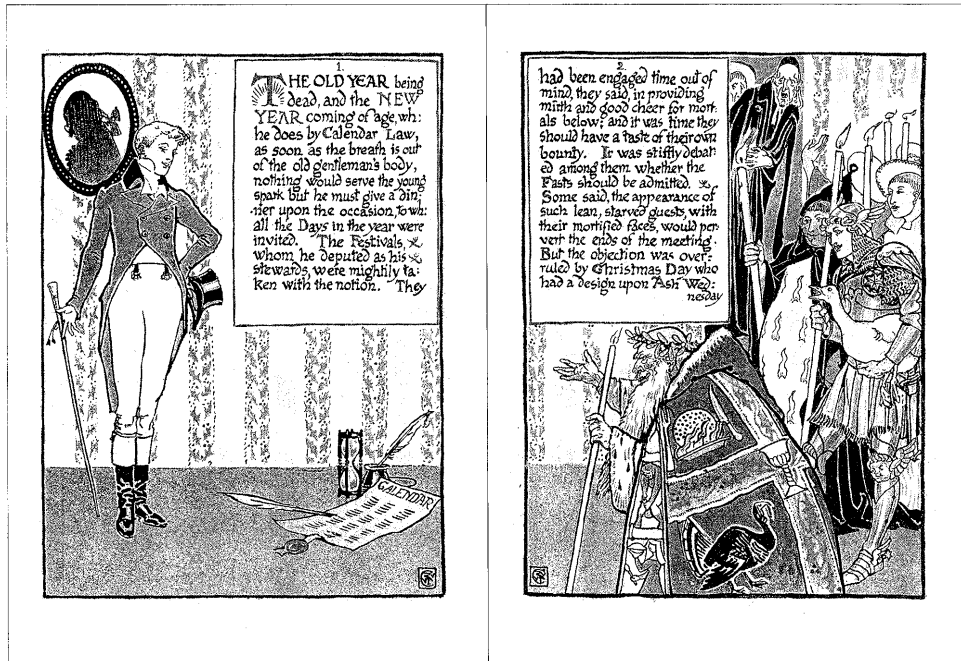


図1 “A Masque of Days” より

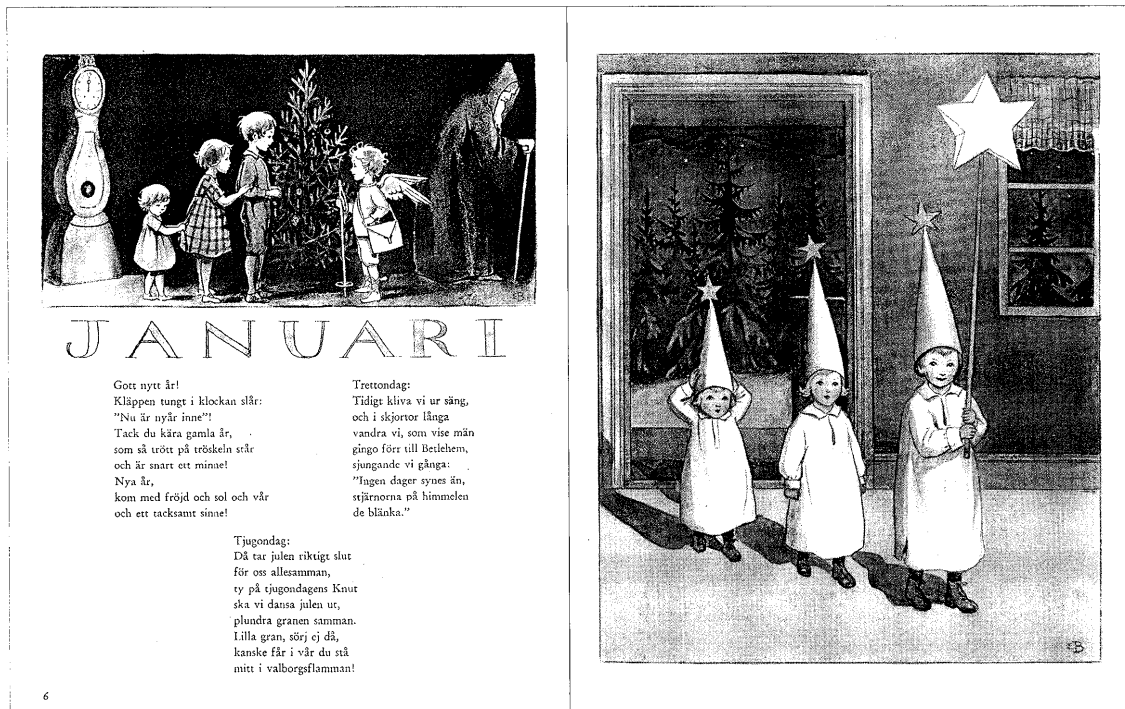


図2 “Årets Saga” より

2) 4月

ベスコフは4月を子どもの道化（ピエロ）の姿で描いている（図3）。これは、クレーンが“April Fool”を大人の道化の姿で表したものの影響を受けている。クレーンの道化は、客を先導する役目をはたしており、白地に黄土色の服を着ている。（図4）ベスコフの道化は茶色と緑色の服と半ズボンと靴下をはいている。茶色は、大地を、緑色は春の芽吹き表す。服には春の花—ブローシッパの形をした飾りボタン、緑色の帽子には猫柳を挿している。4月は、冬と春の気候を併せ持ち、

天候が急変しやすいので、両義性を持ったいたずら者のトリックスターの姿が、空気遠近法を用いた自然主義的風景の中に表わされている。

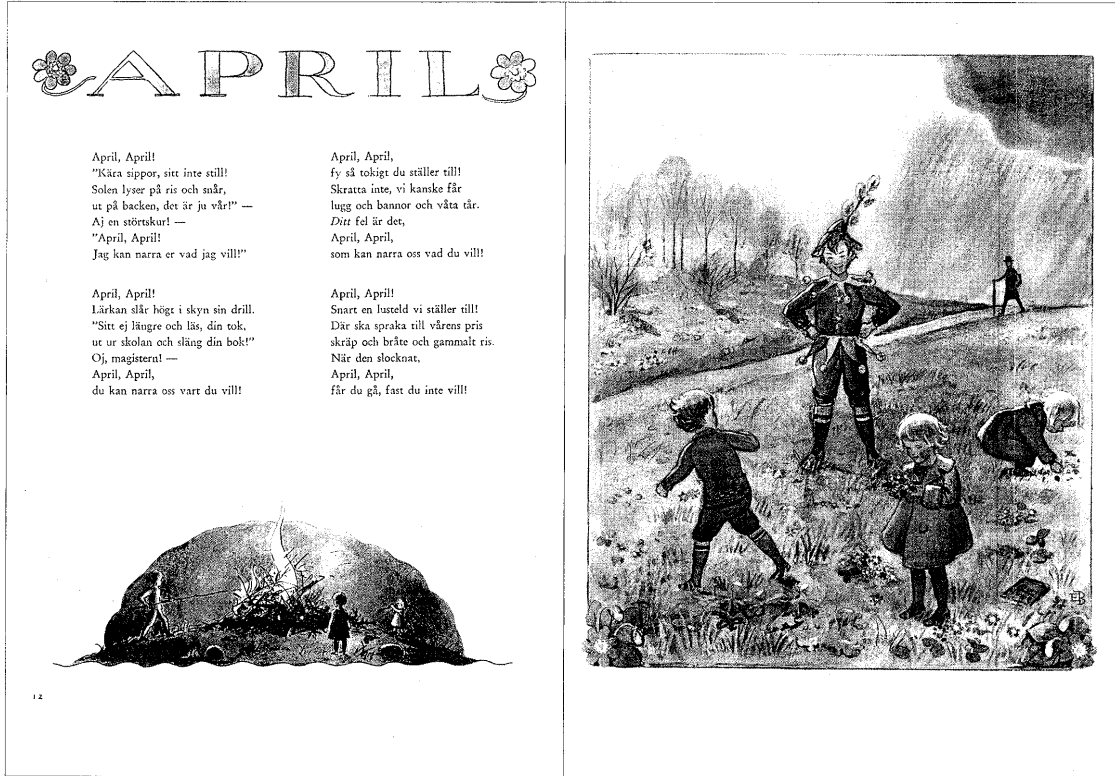


図3 “Årets Saga” より

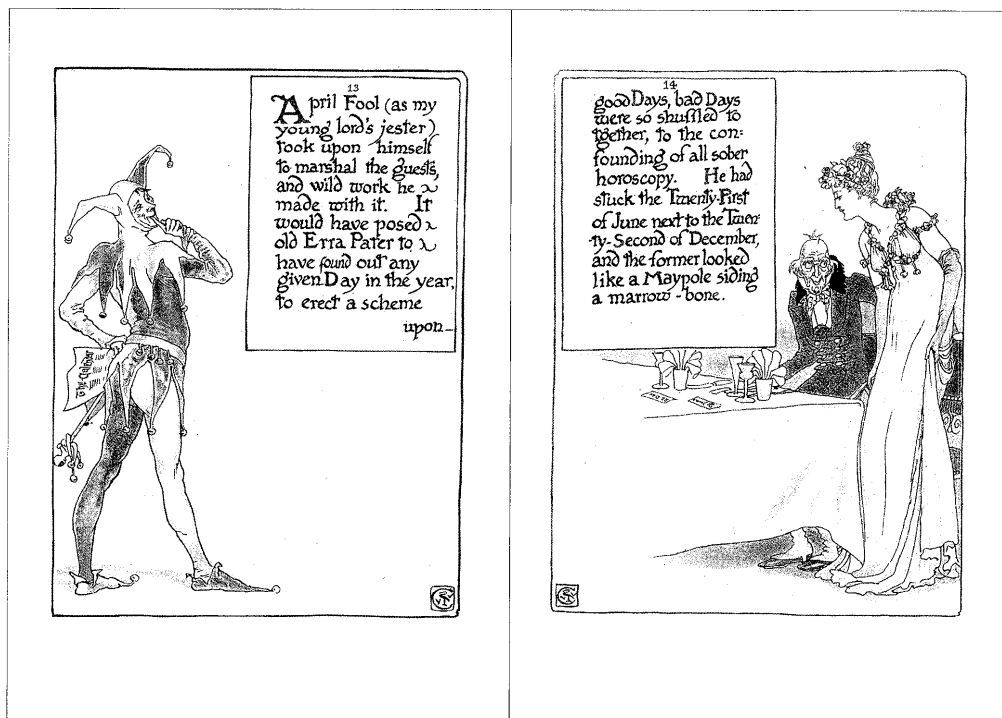


図4 “A Masque of Days” より

ベスコフが4月を子どもの道化の姿で描いているという特性は、次のように考察できる。

- ①2人の子どもが、スウェーデンで春一番の花ブローシッパ（三隅草）をつんでいる点や、又、4月がブローシッパ（三隅草）の形の飾りボタンをつけている点に北方性が見られる。
- ②クレーンの描くエイプリールフールは、大人の道化として描かれているが、ベスコフの描く4月は子ども（少年）の道化の姿で描かれている。その姿は主人公の一人である長男のウツレより少し大きい。「3月爺さん」の命が付き、4月が登場している。
- ③4月は、いたずら（雨を降らせる）をしたり、子どもをからかって、子どもと遊んでいる。子ども達は、ワルプスギルの焚き火をし（図3）、「この火が消える頃、4月さんもう行っていいよ」と言い、4月と思いきり遊んだ後、納得して送っている。

一方、ベスコフの『いちねんのうた』における4月の擬人化は、カール・ティーネマンの絵本の影響を受け、ターシャ・テューダーの絵本へ影響を与えたと思われる。

比較（1）ドイツの“Jahr Und Tag”『1年と1日』（1847年、カール・ティーネマン著）（図5）との比較：

この絵本は、ベスコフより80年前のドイツの絵本である。ドイツの同じ頃の絵本『もじゃもじゃペーター』（1845年）の絵が、ベスコフの絵本『ペッテルとロッタのクリスマス』の子ども部屋の壁に描かれているので、この絵本をベスコフも見ていたと思われる。カールの方は、絵は石版画による風俗画で、都会の親子像（父母子）が描かれている。一方、ベスコフの方は、水彩画による空気遠近法を用いた田舎の自然主義的風景の中に、道化と遊ぶ子どもが描かれている。

4月に注目すると、カールの方では、4月は気まぐれのお天気屋さんで書かれ、帽子が飛ばされるような強風が描かれている。ベスコフの方は、晴れと雨が、異時同図法で描かれている。さらに、カールの方は、「家庭と学校で役立つ教え」として教訓が書かれている。ベスコフの方には、教訓は全く描かれていないが、描かれている子どもは理想の子ども像である。

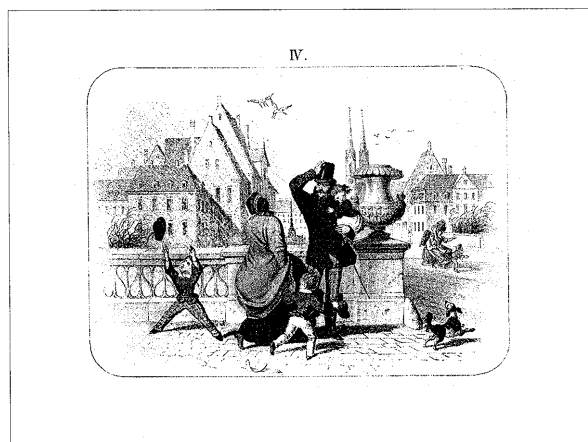


図5 “Jahr Und Tag” より

比較（2）アメリカの“A Time To Keep”（『輝きの季節』—ターシャ・テューダーと子どもたちの1年—、（1977年）、ターシャ・テューダー著との比較：

この絵本は、ベスコフより50年後の絵本である。ターシャでは、表紙などにベスコフからの影響を受けていると思われる。（図6① a, b）ベスコフは母が子に語る形式をとるのに対し、ここでは祖母が孫に語る形式をとっている。4月に注目すると、『4月の雨は5月の花を運んでくる。—

マザー・グース (の言葉より)』』と書かれ、復活祭などの絵が描かれており、内容はベスコフと異なる。(図6②)



図6①a “Årets Saga” より

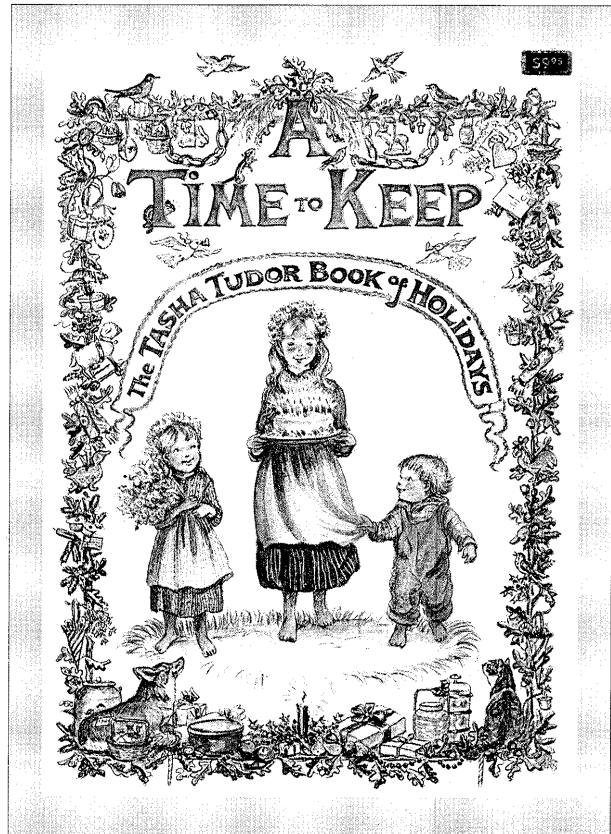


図6①b “A Time to Keep” より



図6② “A Time to Keep” より

3) 春の王女

『花のうた』(シャンナ・オーテルダール文、ベスコフ絵:1905年)では、春の女神マヤが、春の使いの女の子をよこした。自然主義的風景の中に登場したその女の子は、ブローシッパ(三隅草)を髪に飾り、すみれ色のベストを着て、緑の縞のスカートに白樺の皮の靴を履き、トッシラゴー(落タンポポ)をもち、お日様の光を腕いっぱい抱えて歩き、金色の花粉を振りまく。冬王の王子からは、「お日様のお嬢さん」と呼ばれている。(図7)



図7 『花のうた』より

『ウツレのスキーの旅』では、春の王女様が緑色の萼の形の玉座の車に乗り、白い蝶に引かれ飛翔して、空気遠近法を用いた自然主義的風景の中に登場する。車の黄色い車輪は、トルンホルムの太陽(日輪)馬車及び太陽神を思わせる。(図8)



図8 『ウツレのスキーの旅』より

春の王女は、クレーンの著“Flora’s Feast” (1889) に登場する“Queen Flora”に影響を受けていると思われる。“Queen Flora”は、髪に赤いスカーフをかぶり、月桂樹の冠を付け、2本の笛を吹き、2羽の燕が飛ぶ中、小さな花を撒き散らしながら(図9)、クロッカスなどの草花を長い冬の眠りから覚まして歩く。(図10)

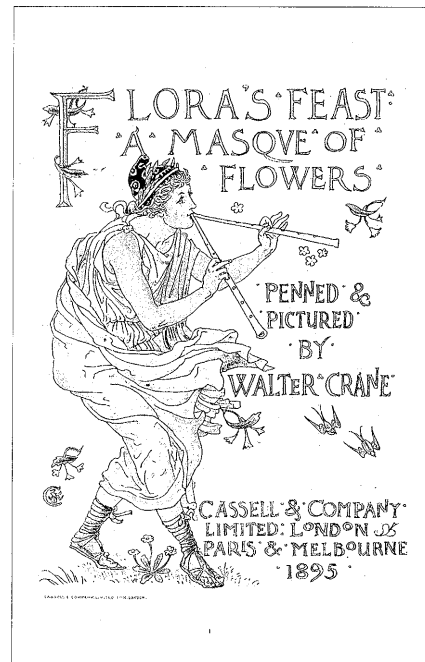


図9 “Flora’s Feast” より

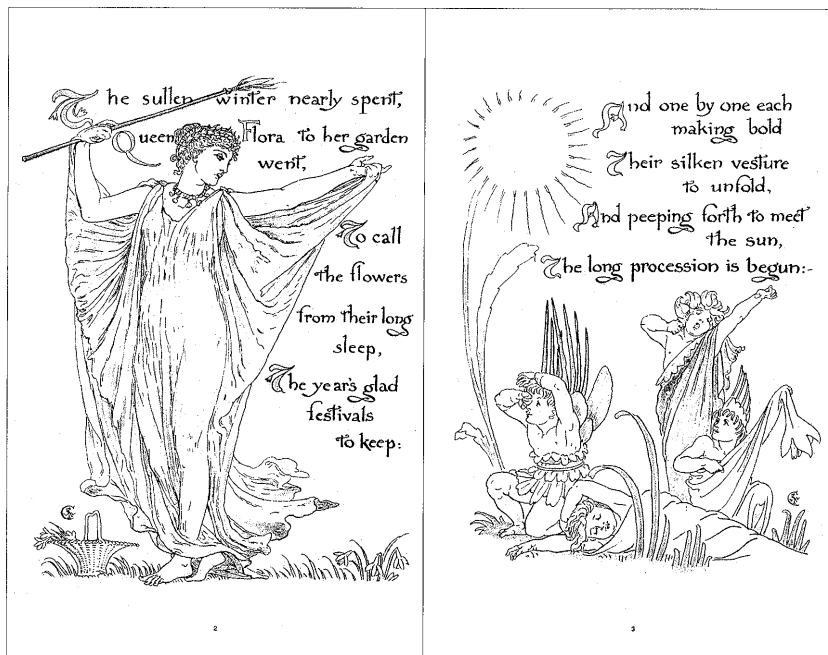


図10 “Flora’s Feast” より

他方、ベスコフが描く春の王女は、黄色いドレスを纏い、車を白い11羽+2羽の蝶に引かせ飛翔しながら、青い花を撒いている。(図8参照) ベスコフの春の王女様は、『花のうた』に登場した春の使いの女の子の姿を、発展させていると思われる。雪解けばあさんは、真新しいエプロン(トッシラゴーの花模様)をかけ、満足そうに春の王女に挨拶をする。(図8参照)

冬王は、洞穴のような氷の玉座に座り、右手に氷柱、左手に雪の玉をもち、春の王女に対応している。(図11) 冷たく、重い静止のイメージの冬王に対して、春の王女は暖かく、軽やかで動的である。冬王は、森の中の城でラップランド人に子どもへのクリスマスプレゼント(スキー、そり、

スケート靴、スキー手袋) を作らせている点でサンタクロースのイメージと重なる。白霜じいさんは、雪解けばあさんに対応している。

ベスコフは、春の訪れを春の王女に擬人化した。その特性は次のように考察される。

①ブローシッパ (三隅草) やエプロンの模様がトッシラゴ (落タンポポ) というスウェーデンで春を一番で告げる花を描いた点に、北方性の付加が見られる。

春の王女を、太陽車輪の御者に形象化し、蝶に引かせた点にベスコフ独自の北方性が見られ興味深い。北欧は、太陽の光が少ないので、太陽の光への憧れが強く、古くから太陽神への信仰があった。太陽は回転するイメージで捉えられていた。

②北欧神話『エッダ』の中に、オーディンが、太陽を運ぶ御者 Dagr (ソール：女) を選び2頭の馬にひかせたとある¹⁰⁾。

③ベスコフの描く春の王女は、小さな花を撒き散らしながら、草花を長い冬の眠りから覚まして歩く点が、クレーンの描く“Queen Flora”からの影響を受けていると思われる。しかし、“Queen Flora”は大人に形象されているが、春の王女は子ども (少女) として形象されている。春の王女は、「春の使いの女の子」の像を発展させていると思われる。

④ウツレは、森の中で冬王に「有り難う、親切な冬王様」と挨拶し、対面した時には、丁寧にお辞儀をしている。(図11) 又、ウツレは、白髭じいさんにも、お辞儀をし、「有り難う、さようなら」と挨拶している。さらに、ウツレは、雪解けばあさんが、真新しいエプロンでほほえんで挨拶して春の王女を迎える姿を見て (図8)、雪解けばあさんを好きになる。このように冬生まれのスキーが大好きな少年ウツレが、雪の消える春を受け入れるベスコフ独特の物語が組み込まれている。



図11 『ウツレのスキーの旅』より

英国の Richard Doyle 絵、William Allingham 著の大型絵本 “In Fairy Land” (1870) では、妖精の王女が12羽の蝶にひかれて飛翔している絵が描かれており、ベスコフはこの影響を受けたと思われる。(図12)

スイスの Ernst Kreidorf 著 “Blumen Märchen” (1900) で、「きんぼうげのお出かけ」において、こおろぎの御者でアゲハ蝶と黄色い蝶に引かれている姿が描かれている。(図13)

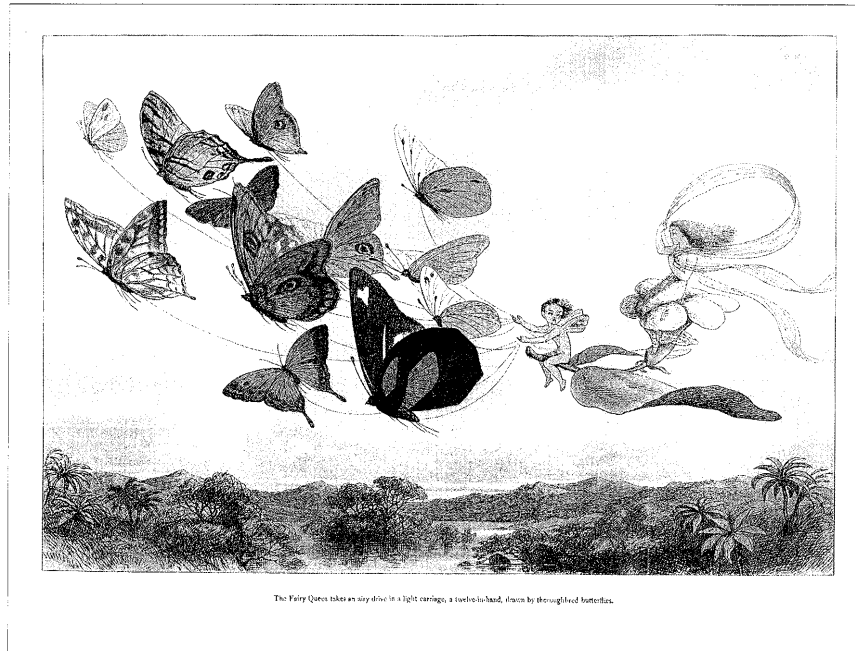


図12 “In Fairy Land” より

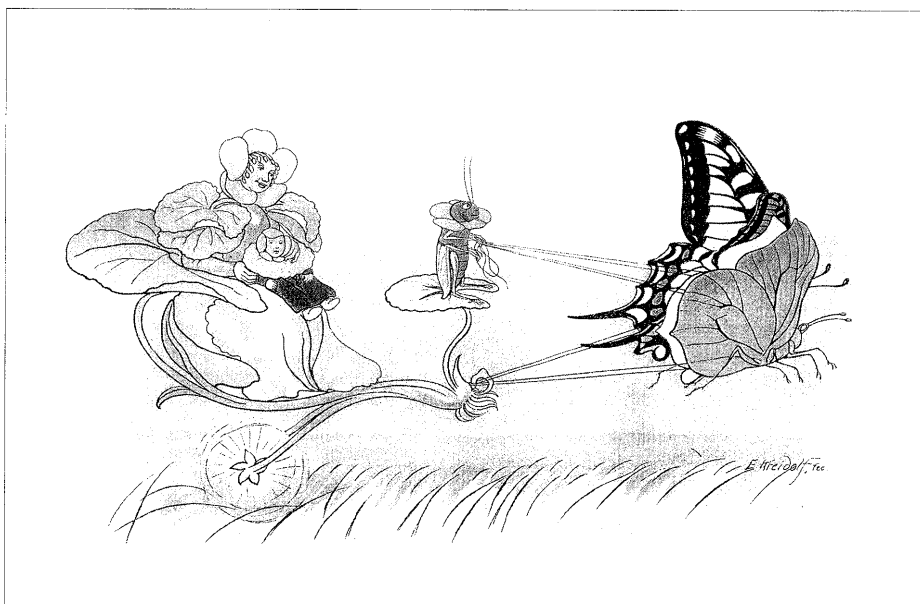


図13 “Blumen Märchen” より

4) 夏至の精

『リーサの庭の花祭り』の夏至の精は、クレーンの『暦の仮面舞踏会』に描かれた夏至の日の影響を受けたと思われる。クレーンの夏至は、髪に花冠を付け、左手に扇子を持ち、花の首飾りと胸飾りをつけ緑のドレスをまとっている（図4）。ベスコフの夏至の精は、髪に花冠を付け、右手に花束を抱え、左手にチューリップを持ち、花授を付け花模様のドレスをまとっている（図15）。夏至の精が、リーサの臉に花の滴をたらすと、リーサは花の動く様子が見えて、花の言葉が分るようになる。リーサが目を開けると、夏至の精は消えていた。

ベスコフの描く夏至の精の特性は、次のように考察される。

- ①スウェーデンで夏至の頃に咲く草花の花束、花冠、ドレスの模様に、北方性が見られる。
- ②クレーンの夏至は、若い女性として描かれ仮面舞踏会のテーブルに着く際と（図4）、最後に退場する際には、老人の姿の冬至と対で描かれている。退場するときには、冬至が針ねずみのような小さな紳士の姿になって、漆黒の闇にくるまって去って行くのに対し、夏至は長いマントを羽織り、深紅と黄金色の太陽に彩られて後ろを振り向きながら西に帰る。（図14）
- 他方、ベスコフの夏至の精は単独で、母親のような大人の女性の姿として描かれている。（図15）
- ③リーサが、草の上に腹ばいになり、草原の花とお辞儀ごっこをしていると、名前を呼ぶ声がし、夏至の精に庭の花祭りに招待される。（図15）

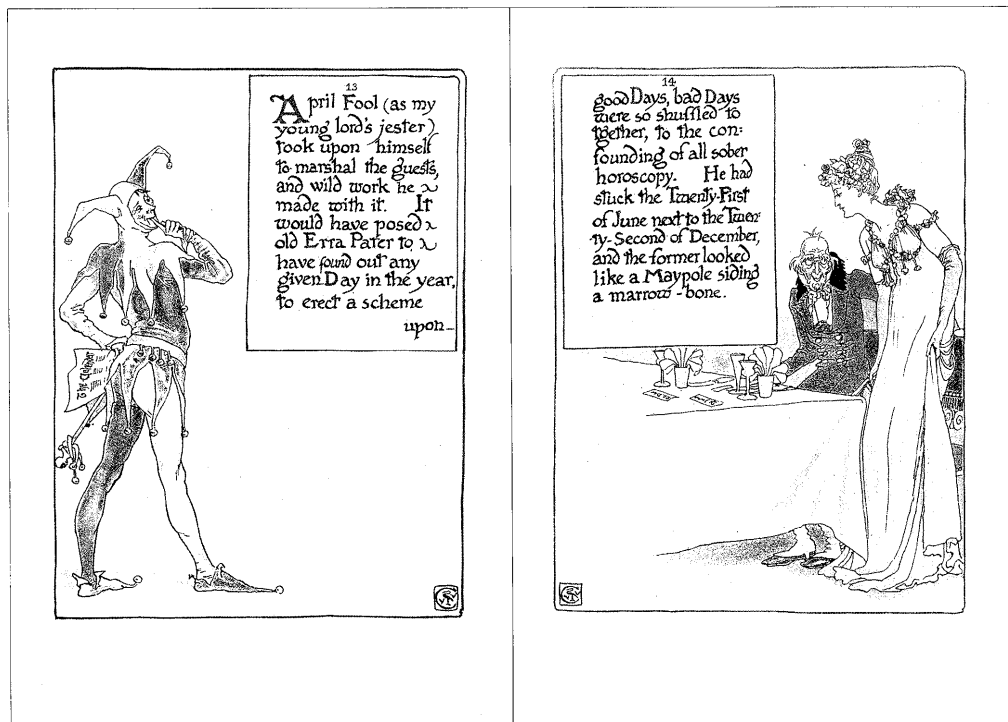


図4（再掲）“A Masque of Days”より

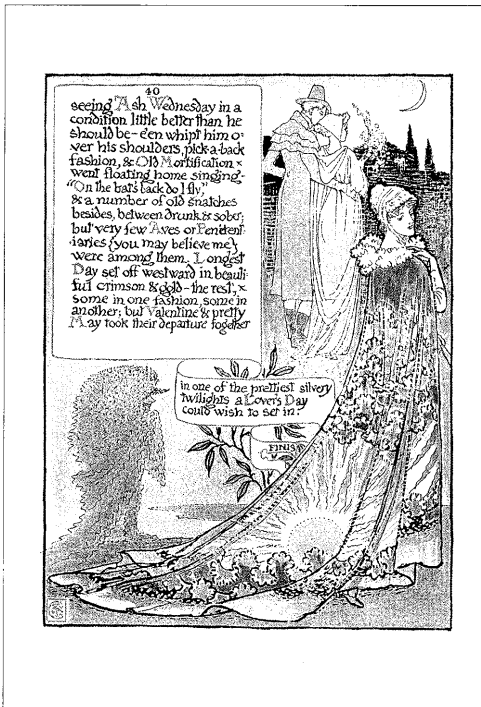


図 14 “A Masque of Days” より



図 15 『リーサの庭の花祭り』より

3. 近代的母子像

ベスコフの季節の廻りと子どもを描いた絵本の第二の特徴として、近代的な母子像に形象化した点が挙げられる。

ベスコフの『いちねんのうた』の2月には、台所で働く母親の姿（セムラ作り）とそれを手伝う

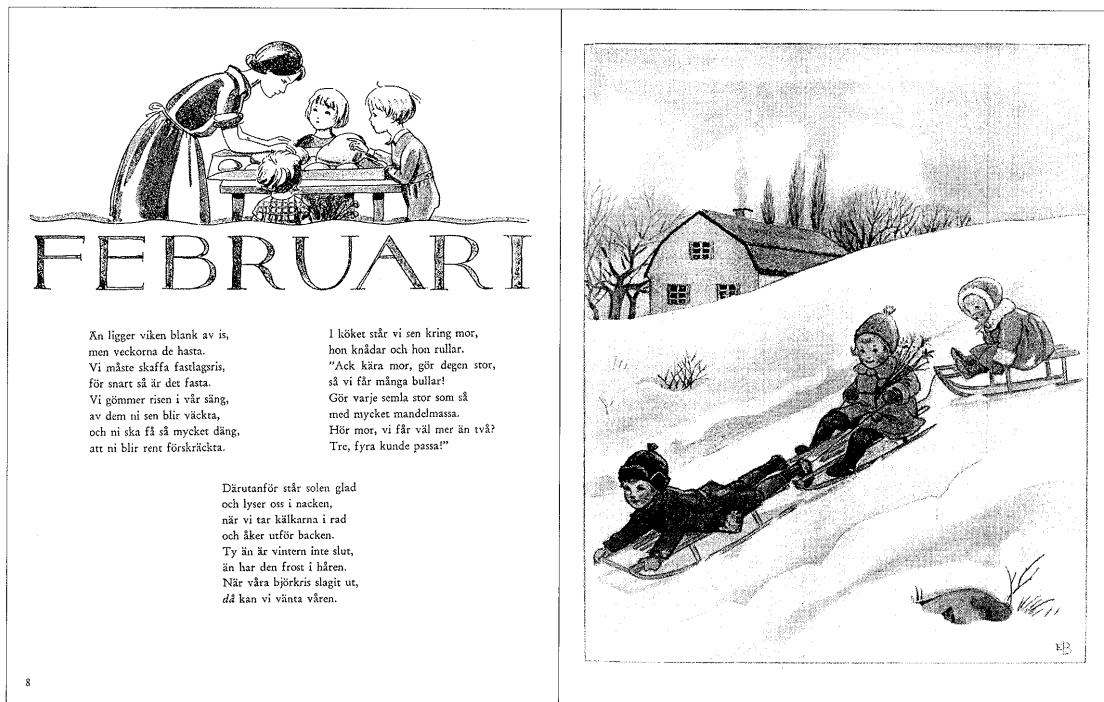


図 16 “Årets Saga” より

子どもの姿を描き (図 16)、6 月には膝の上に子どもを抱きながらボートの舵をとり (新しい時代へ) 漕ぎ出してゆく母親や、水着姿で裸の子どもと水遊びをする母親が描かれている。(図 17)

11 月は、膝の上に子どもを抱いて本を読んでいる母親を描くなど、近代的母子像を描いている。(図 18)

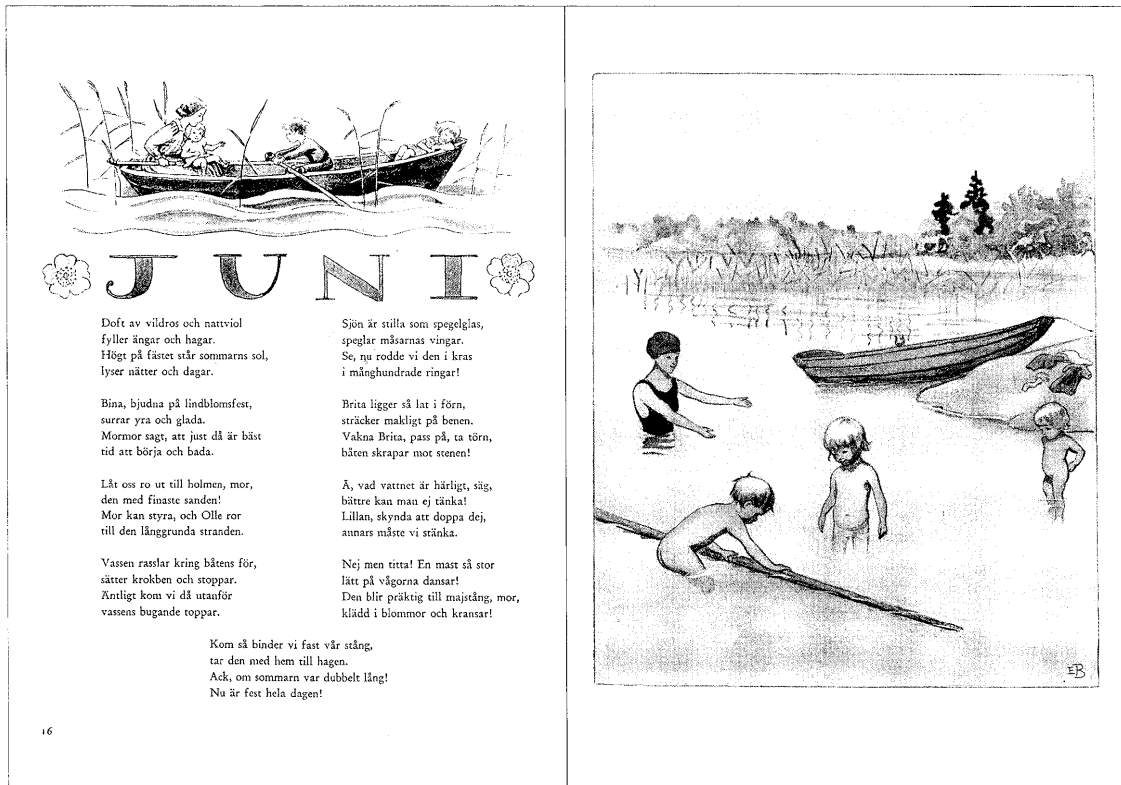


図 17 “Årets Saga” より

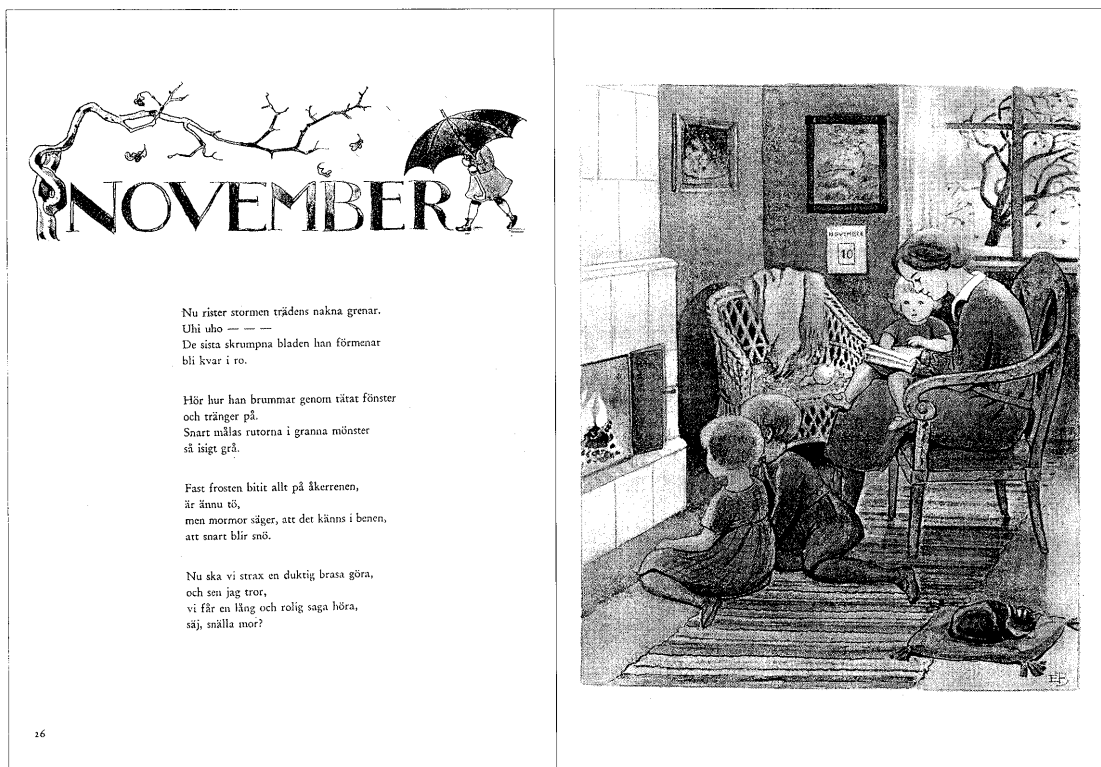


図 18 “Årets Saga” より

ベスコフの『ウッレのスキーの旅』において、スキーに行くウッレを温かく送り出す母親を描いている。

初期は、クレーンからの模倣に近い感じであったが、後半では自然主義的風景の中にベスコフ独自の女性(母子)像を描いている。

しかし、エルサ・ベスコフは父子像を絵には描かなかった。何故であろうか？ 第一の理由は、エルサ・マートマンが15歳のとき、父ベルント・マートマンを亡くしている。

第二には、エルサ・マートマンは23歳のとき、ウプサラ大学で神学を学んだキリスト教の牧師ナタナエル・ベスコフと結婚した。彼女はキリスト教に批判的であったエレン・ケイを師として育ったのでこの結婚生活には困難が多かったと思われる。初期の挿絵には、「E. M.」とサインがある。しかし、ナタナエルからのクレームがあり「EB」とサインが変化した。「エルサ・ベスコフ 旧姓マートマン」¹¹⁾と書かれている絵本(1898年出版の“Barnen på Solbacka”)があるのは、エルサの心の中の葛藤を表していると思われる。

その代わり、叔父像は繰り返し描いた。叔父さんは3人のおばさんシリーズ5冊の中の青おじさんや『ペーテルおじさん』(1949年)として形象化している。エルサは、父の死後に叔父叔母と住んだことがあり、実在のユーシェン叔父がモデルである。

ベスコフ作『ペッテルとロッタのクリスマス』で、クリスマスに子ども達に贈り物を持ってくるヤギおじさんは、実は青おじさんが変装している。(図19)髭を生やしたやぎおじさんは、古くはスカンジナビア各地で行われていた冬至の山羊(やぎ)祭に由来する。冬至の牡山羊と牝山羊は北欧神話『エッダ』の中のロキとスカジを体現している。

ベスコフは、季節の擬人化においては、クレーンを引用模倣した。擬人化された季節と交流する子どもは、母親がこう育てて欲しいと願う、挨拶がきちんとでき勇気のある理想の子ども像であった。一方、母子像では、6人の子どもの母親として生きた自らの姿を描いたので、先達の絵を引用する必要も無かった。

エレン・ケイの教えを受けたエルサ・ベスコフには絵本を描くことにより、「自立してこの時代を生きている」という自負があったからこそ、牧師の妻であり6人の子どもの母親であるという多忙な中で、33冊の絵本を完成させることができたのである。



図19 『ペッテルとロッタのクリスマス』より

4. 総括

- ①初期には、クレーンからの引用が見られたが、後にスウェーデンという地の北方性を付加しながら、ベスコフ独自の近代的な自然主義的風景を描いた。又、「有り難う」「こんにちわ」、「さようなら」等の生活の基本にある挨拶をきちんとし、勇気ある理想の子ども像や近代的母子像を創造していった。
- ②スキーをする子ども、太陽車輪、やぎおじさんなど、北欧人の精神の基層にある古い北欧神話に基づく世界を描いている。
- ③ベスコフは、過ぎ行く季節を老人の姿に、これから廻ってくる季節を子どもの姿に擬人化している。即ち、過去を老人に、未来を子どもの姿に擬人化した。その理由は、子どもの中に新しい生命を見、子どもによって蘇りを体験しつつ、廻りくる季節を迎えていたからであろう。「老人と子ども」は対で登場している。
例：冬王と春の使いの女の子、雪解けばあさんと春の王女、去年さんと新年さん。
- ④四旬節、ワルプルギスの焚き火、夏至祭、ロシア祭など、伝統的な行事には触れるが、それを主として描くことなく、季節の廻りに目を見張り、自然と静かに交流する子どもを描いている。

目に見えない時間を絵本に作品化して、子どもに具体的に語るのは非常に難しいことである。子どもが、時間の概念を把握できるのは、空間の概念より遅く、10歳頃と言われている。空間の方は、準拠する鍵になる場所を作りそれとの関係で決められる。ところが、時間の方は、大人は、時計に準拠するが、子どもは準拠する鍵が無いので把握することが難しいと言われている¹²⁾。

エルサ・ベスコフは、季節の廻りを擬人化することで、「準拠する鍵になる時」を子どもに分りやすく描いた点が秀逸と思われる。

参考文献

- 1) "Elsa Beskow En BIOGAFT", Stina Hammar Albert Bonniers Förlag 1958
- 2) "Sol-ägget Fantasi och Verklighet I Elsa Beskow Konst", Stina Hammar Albert Bonniers Förlag 2002.
- 3) "Elsa Beskow Vår Barndoms Bildskait", National Museum, Stockholm 2002.
- 4) 『エッダー古代北欧歌謡集』谷口幸男、新潮社版、1973年
- 5) 『生と死の北欧神話』水野知明、松柏社、2002年
- 6) 『リーサとラッセ』美谷島いく子、お茶の水女子大学児童文化研究誌『舞舞』19号、1998年
- 7) 『漱石と世紀末芸術』佐渡谷重信、講談社学術文庫 1994年
- 8) 絵本を通して異世代交流を考える『リーベとおばあちゃん』美谷島いく子、松本短期大学研究紀要11号、2002年
- 9) 『マールブルグ子ども歳時記 その二、早春の章』美谷島いく子、お茶の水女子大学児童文化研究誌『舞舞』6号、1984年
- 10) 『エルサ・ベスコフの絵本の研究③ エルサ・ベスコフの絵本における植物の擬人化』美谷島いく子、松本短期大学研究紀要15号、2006年
- 11) 『エルサ・ベスコフ』菱木晃子、「母の友」599号、福音館 2003年
- 12) 『ことばの誕生』岩淵悦太郎他、日本放送出版協会、1980年